

# 文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その9）

—仙台浄瑠璃で語られた源義経など—

相原 康 二 ※

はじめに

旧仙台藩領内に仙台浄瑠璃（御国浄瑠璃・奥浄瑠璃・御国節とも）なるものが流布・定着し、ここでは奥州藤原氏や源義経が主要なテーマとして語られていたことから、今回は奥浄瑠璃を概観することとした。

1980年5月刊行の『国史大辞典』には次のようにある。

「奥浄瑠璃 奥州、特に宮城県・岩手県地方で行われた浄瑠璃。お国浄瑠璃とも仙台浄瑠璃ともいう。現在これを語る人は絶滅にひんしているが、最近まで数種の流派が行われた。楽器は近世以後三味線を用いているが、古くは琵琶や扇を使った。本来盲人の語り物であって、口授によって伝承されてきた。

今日知られている曲目は「田村三代記」「鞍馬破」「丸山物語」「迫合戦」「御所の的」「尼公物語」「牛若東下り」「牛玉の姫問定」など、異本を加えて六十以上を数える。最も人気のある「田村三代記」は板本の「たむらのさうし」と比べると、鈴鹿山の太たけ丸退治はないが、その他にかなり共通したものがある。しかも水仕女・悪玉など独特である。また、「迫合戦」は国立国会図書館・彰考館の「もろかど物語」に非常に近く、本来東北地方で育った語り物であることがわかる。

これらは中世の語り物の原形をかなりよく残していると思われる。」（『国史大辞典 第二巻』1980年 吉川弘文館発行）

この基本的理解を下敷きとして、江戸時代の紀行文・旅日記に出てくる仙台浄瑠璃を概観し、次に、この主題に関わる文献類を概観し、仙台浄瑠璃の岩手県地方における在り方を整理する。

## 一 紀行文に記された仙台浄瑠璃

○松尾芭蕉『おくのほそ道』元禄二年（1689）旅行、同十五年（1702）刊

「（末の松山）

それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造て末松山といふ。まつのおひく皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと、悲しさも増りて、塩がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴さかつ声く々に、「つなでかなしも」とよみけん心もしられて、いと哀也。其夜目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかし

ましけれど、さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚らる。」

『おくのほそ道』は芭蕉が実見した事象ばかりではなく、文学的創造ともいうべき内容が多いと評価されているが、この「琵琶をならして」の記述が実見に基づくものとすれば、元禄二年には仙台浄瑠璃の伴奏に琵琶が用いられていたことになる。このことは後述する大槻論文には見えていないので、貴重な記述となる。

○『曾良旅日記』元禄二年五月八日(陽暦六月二十四日)の条(るびは引用者による)

「一 八日 朝之内小雨ス、巳ノ剋ヨリ晴ル。仙台ヲ立。十符菅・壺碑ヲ見ル。末ノ剋、塩竈ニ着、湯漬など喰。末ノ松山・興井・野田玉川・おもはくの橋・浮島等ヲ見廻り帰。出初ニ塩竈ノかまを見ル。宿、治兵へ。法蓮寺門前、加衛門状添。銭湯有二人。」

とのみあつて、琵琶法師の記述はない。

○蓑笠庵梨一の「奥細道菅菰抄 下」塩釜の条、安永七年(1778)八月刊(ルビは原本、るびは引用者である)。

「上略 其夜目盲法師の琵琶をならして奥上るりといふものをかたる。平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、

盲ハ積名ニ、盲ハ茫也。茫茫トシテ無キ所見ル也、ト云。琵琶ハ、積名ニ云、本ト胡中馬上ニ所敵ク、推テ手ヲ前ムヲ曰ヒ琵琶ト、引テ手ヲ却クヲ曰フ琵琶ト。

因テ以テ為名ト、ト。然レバ、本ト批把ノ音ヲ仮ルナリ。奥上るりとは、今俗の仙台浄瑠璃といふものにて、多く義経奥州下りの事などを作りて語る也。上るりは、豊臣秀吉公の侍女阿通と云もの、牛若丸と三州矢作の長が娘浄瑠璃姫との事を編て書となし、十二段と名づく。後京師に滝野検校、沢角検校と云二人の警者ありて、此十二段に節シを付てかたり始る。是よりして浄瑠璃の名ありと云。平家は、平家物がたりを云。信濃ノ前司行長が作にて、生仏と云警者の琵琶に合せ始たる事、徒然草に見えたり。(按ず

るに仙台上るりは此遺風なるべし)舞は、諷に似たるものにて、八島・高館・笈探シなど云名あり。越前の幸若、代々専門たり。幸若・笠屋・台頭の三流有と云。ひなびは、鄙の字にて、いなかめきたる事也。

辺土の遺風忘れざるものから殊勝に覚らる

遺風は風義ののこるを云。からは、俗語のからにて、故と云如し。殊勝ハ、コトニスグルト訓ズ。涅槃経ニ、諸善法ヲ最モ為殊勝ト、ト云リ。但シ日本ノ俗話ニ用ルハ、ヤサシキ意也。(下略) (以上は萩原恭男校注『芭蕉 おくのほそ道』2001岩波書店発行による)

○菅江真澄①『かすむこまがた』天明六年(1786)二月六日の条、旧仙台藩警井郡平泉村(現西磐井郡平泉町)にて。(ルビは原文、るびは引用者)

「六日 あしたは春雨めきて、夕月ほの霞て出ぬ。琵琶法師来りぬ。是も慶長のむかしより三線にうつりて、猫の皮も紙張の撥面ニ化りたるが多し。曾我、八嶋、尼公物語、湯殿山ノ本事、あるは千代ほうこといふ女の戯ものがたりなソドの浄瑠璃をかたれり。こたひは「むかし曾我也」声はり上て、「ち、ぶ山おろす嵐のはげしくて、此身ちりなばは、いかゞせん」と、語りくくても入りぬ。明なばとく出た、むとて枕とれば、ひましらみたり。」

この記述から、真澄が滞在していた千葉某家(善阿弥に居住した肝入か)を琵琶法師が訪れたこと、彼らが「紙張の撥面の三線」を用いていたこと、さらに演目の一部などが知られる。

○菅江真澄②『同』同年二月廿一日の条 同胆沢郡徳岡村(現奥州市胆沢小山)の村上家(肝入などを勤める名家)にて

「廿一日 けふは時正也。近隣の翁の訪来て、都は花の真盛ならむ、一とせ京都の春にあひて、嵐の山の花をきのふけふ見し事あり、何事も花のみやこ也とて去りぬ。数多杵てふものして餅搗ざわめきわたりぬ。けふも祝ふ事あり。日暮れば某都某都とて兩人相やどりせし盲瞽法師、三絃あなく

りいでてひきたつれば、童どもさし出て、浄瑠璃なちよにすべい、それやめて、むかし〜語れといへば、何むかしがよからむにといふに、いろりのはしに在りて家室のいふ、琵琶に磨確でも語らねか。さらば語り申さふ、聞たまへや。「むかし〜、どつとむかしの大むかし、ある家に美人ひとり娘が有たとさ。そのうつくしき女ほしさに、琵琶法師此家に泊りて其母にいふやう、わが家には大牛の臥ほど黄金持たり。その娘をわれにたうべ、一生の栄花見せんといへば母の云やう（下略）」

この記述から、肝入の家では琵琶法師を泊めていたこと、その伴奏は三絃（しゃみせん）であったこと、さらに、客の求めに応じて、浄瑠璃以外の演目も語っていたことなどがわかる。

○菅江真澄③ 『はしわのわかば』天明六年五月十日の条、江刺郡黒石村（現奥州市水沢黒石町）の行道（詳細不明）の家にて

「十日 あさいして、日たけて起たり。けふは、此江刺ノ郡黒石ノ行道の家に在りて人々（と）歌よみあそび、あすなん胆沢へいなんなんどいへるに、とみなる事とてふみもて来れば、こを見つゝ常雄（鈴木）は飯り去き。よべよりこゝに、めくらほふしども来宿りたるをよび出れば、南部閉井（伊）ノ郡の浦人、宮古の藤原（現宮古市藤原）といふ処といへり。語りさふらへといへば紙張の三絃とうだし、こわつくりして、尼公物語とて、佐藤庄司が家に弁慶、義経、偽山臥（伏）となりてやどりし事を語り、をへぬれば小盲人出て手をはたとうちて、それ、ものがたり語りさふらふ。「黄金砂まじりの山の薯蕷、七駄片馬すつしりどつざりと曳込だるものがたり」また「こんが河原の猫の向面、さるのむかつら」「鉦とられ物語り」「しろこのもち、くろこのもち」などかたりくれたり。」

この記述から、盛岡藩領出身の盲目の法師の存在、紙張の三絃の伴奏、演目の中に浄瑠璃から派生したであろう「地方的」な演目もあることなどがわかる。なお、常雄とは胆沢郡六日入（現奥州市前沢）に居住し胆沢郡大

胆入を勤めていた鈴木常雄で、仙台藩入りをした真澄を歓待した重要人物である。（以上は内田・宮本編『菅江真澄全集 第一巻』1981 未来社発行によった）

○富本繁太夫の『筆満可勢』文政十一年（1828）七月廿九日の条、仙台藩領玉造郡川渡温泉（現宮城県大崎市鳴子温泉）にて（ルビ・（）は引用者による）

「廿九日 朝天氣。九ツ頃より大風雨大あれ。八ツ頃より天氣二成ル。

一、百文 按摩。萩彌といへる人來り松阪節ヲ聞く。然二古川（現大崎市古川）

湯屋幸吉殿、石之巻（現石巻市）徳左衛門子分、此所ニ來てゐて座敷ヲする。梅川上・あわの鳴門・小ゐな半兵衛。

仙臺一ヶ國ハ、太夫其外何藝ニても松之都と申座頭有りて、其藝者の分限

ニ寄て、付届する。此所參りゐて、殊の外むつかしく、代の盲人を使ニ來ル。

此方一向ふ不構。其代度々來ル。我レ申ニハ、此方ハ此よふ成所にて商賣

致スものにあらず。是迄參る道にて、世話ニ成し人々來りゐて、所望故語

りしなれとも、祝儀ハ不取。其座頭何藝也と聞し所、御國浄る里なりとい

ふ。段々様子ヲ聞くに、江戸ニていふ仙臺浄る里也。盛衰記・（虫食い）・曾

我杯、軍書ニ有るもの、何ニても皆語ル。尤三味線同し事斗彈、節もおなし。

夫ゆへ一夜聞く時ハ、毎晩聞度、軍書構（講）釋ヲ聞と同じ。勿論此盲人、

器用也。然に無法ヲいふて、決て取合ず。（下略）」

この記述から、仙台藩の末端における芸人等の「統制」の様子、御国浄瑠璃の演目の一部、三味線の伴奏付きであるが、その曲節の単調さなどを垣間見ることが出来る。（以上は東北大学附属図書館所蔵資料によった）

○福田弥五八の『胤馬代金井往返日記』天保四年（1833）一月廿

一日、仙台藩領伊具郡（現宮城県伊具郡）にて。（ルビは引用者による）

「翌廿一日 朝雪未止マ、四ツ時頃ニ相成、漸止ム。此時尺杖をさすニ六寸余も積れり。夫より天氣ニ相成候得共、雪つもり馬見難由にて休足ス。但此辺奥州仙台伊具郡、土地宜ク平地、殊に石砂一切無之、本眞土ニ候

所二寄水おふく浮み候故、乾田ニも畑ニも難相成、芦原ニて有之所三分一も見え、且又水甚た悪く井戸水用候得共、此水もしほ水とやらいふて其色米の式度目洗候水の如く濁り、其上湯ニ熱立候へハ金しふとやらのことく水垢うかみ候て、見る時ハ吞かたし。尤田畑当分の土地ニ見え、下野国に譬ハ、栃木の辰巳にて藤岡といふ所より板倉辺へ通ル土地ニ能似れり。始終道わるく土芥等わらじに附、歩行甚た不自由の場所なり。今日八ツ頃より風大ニ出、吹雪昼中臙月夜のことし。然ル処ニ幼年の盲人三絃を携來る処、戻りかたく、暫く休む内ニお国ふしといふ浄瑠璃をきく事を得たり。甚以変にして語るに足らず（下略）

日光奉行の命を受けた福田弥五八が、種馬の買い付けのために仙台藩領江刺郡片岡村岩谷堂（現奥州市江刺岩谷堂）までお往復した際の日記である。当時の岩谷堂は、仙台領南部の岩沼、仙台城下国分町とともに、仙台藩三大馬市の地として有名であった。地元の馬喰たちの協力もあって、福田は無事に使命を果たして帰国したのであった。

福田は肝入的な役職にあり、また、朝鮮人参の栽培や販売にあたる経済人であり、さらに下野狂歌を代表する文化人でもあった。その目から見ると、野趣横溢の御国浄瑠璃は論評に値しないものであったのかしれない。しかし、仙台藩南部の類例として極めて貴重である。（以上は鈴木和子『胤馬代金并往返道中記』2015（有）随想社発行より）

## 二 仙台浄瑠璃に関する『宮城県史』の記述

多くの論考の中から、『宮城県史復刻版14（文学芸能）』によってその内容を概観する（小倉巖「御国浄瑠璃」、（ ）は引用者による）。

「▼名称—奥浄瑠璃、仙台浄瑠璃、御国浄瑠璃、御国節（おくにぶし）、お国浄瑠璃など。

▼淵源等—御国浄瑠璃についての数少ない学術研究の最初のものとして

大槻文彦博士の「仙台浄瑠璃の考」がある。これは明治四十三年（1910）十月、仙台長町の御国浄瑠璃語手赤井沢龍之一（あかいざわりゅうのいち）を東京に招いて、博士宅及び東京音楽学校で演奏させた機会に発表されたもので、『音楽』第二巻第一号（明治四十四年一月発行）に載せられたのを後に『仙臺叢書』に転載された（この際に、音楽学校関係者による「奥浄瑠璃合評」、小倉博の「御国浄瑠璃」も発表されている）。

諸説を総合すると、奥浄瑠璃・仙台浄瑠璃・御国浄瑠璃と言われるものは、古浄瑠璃（江戸初期までの浄瑠璃）もしくはその仙台地方化したものを主とし、またそれらの形式体裁を模倣して作ったものと、近松の改作などで成ったものをいい、特に仙台地方で創作したと思われるものの中には、地方的題材により地方色豊かなものが多い。

▼演奏—最初は朗読体に読み聴かせたものであったが、一歩進んでタタキ即ち扇扇子に合せて、道行・修羅・愁嘆など分類して語るようになったと考えられる。そして元禄頃（17世紀末）には『奥の細道』に見える如く琵琶を伴奏としたらしく、天明頃（18世紀末）からはじめて三味線を用いるようになったと思われる。三味線の手は極めて単純な手を繰返すだけで、扇拍子をそのままうつつした如き感があつたという。

▼流派—大槻博士によれば、御国浄瑠璃には城札節（じょうさつぶし）・かほ一（こういち）節・重一（しげいち）節・喜右衛門（きうえもん）節の四流派があつた。いずれも人名で、そのうち喜右衛門節は最も新しく天保の頃（19世紀前半）に城札節から出たものである。前三者は宝暦頃（18世紀前半）から存在したと考えられ、この三流の祖が扇拍子で語っていた奥浄瑠璃をはじめて三味線にかけたもので、その名がそれぞれの流派の名となったのである。

▼明治以後—語り手は城札節の赤井沢龍之一のほかに、その弟子の伊藤みよ（仙台市長町）、佐藤正直（仙台市茂庭）があり、重札節には佐藤ちゑの

一（白石市）、黄川田きかく一（宮城郡泉町七北田在の松森）があり、かほ一節にかりよう一（石巻市）が居り、志田郡松山にもこの流派の某が居た。昭和になって白石に八島信定、石巻に鈴木幸龍が居たがいずれも昭和二十年（1945）をまたずに死亡し、現在は独りの語り手も存在しない。

▼演目―盲人によって語られたという御国浄瑠璃の特質から「正本」と称すべきものは見られないが、その写本は七十余りが現存する。その内容から古浄瑠璃中心のもの・判官物及び関係曲・奥浄瑠璃の地方的特色あるもの・近松物及びその他、の四種に大別できる。

\*阿彌陀胸割（あみだのむねわり）―六段。古浄瑠璃の「阿彌陀胸割」に近いもので、阿彌陀が孝子の身替りになる物語。

\*大峰の本地（ほんじ）―六段。

\*小栗判官―六段。

\*後推天―六段。「熊野権現記」が原形。

\*熊谷先陣問答（くまがえせんじんもんどう）―六段。「熊谷先陣譚（あらしそい）」が原曲で、後妻であり継母である悪人が、我が子を立てようとして、先妻の子を失おうとするが、因果応報その身を亡すというお家騒動の物語。

\*四天王国廻（くにまわり）―十段。全くの金平物（きんぴらもの）で、広長が叛逆して將軍頼義を奪われたので、四天王が諸国を廻つて捜し出す武勇談であり、原曲は「公平生捕問答（きんぴらいけどりもんどう）」及び和泉太夫（いずみたゆう）の「四天王国廻」で、これらの改作である。

\*隅田川梅若丸の御事（おんこと）―六段。享保頃（18世紀初）盛行した「隅田川」と殆ど同じ内容で、お家騒動に、子を探す母の物狂いを取りまぜた物語。

\*善光寺如来由来―五段。善光寺縁起に拠るもので「月光長者」「善光寺本地」と殆ど同文。

\*為政忠臣記―六段。「公平法問譚（きんぴらほうもんあらい）」「忠臣身替物語（ちゅうしんみがわりものがたり）」の改作。源頼義が二男の義綱を出家させようとしたが、義綱は父の命に従わず金平を援を頼む。義家と三浦為政が金平討伐に向つたが、為政はわが子を身替りとして主君の子義綱を助け後に勘当御免を願うという為政金平の忠臣物語。後世の身替り物に影響を及ぼした点が多い。

\*竹生島之本地（ちくぶしまのほんじ）―七段。「松浦長者」の改作で、女主人公が奥州まで落ちてゆく道行を加えて奥州化したもの。異本が四種ある。

\*西之宮（にしのみや）由来記―一段。浦島が竜宮から帰って、伊勢大神宮のお陰で西之宮恵比寿大神になる物語。

\*梵天国（ぼんてんこく）―六段。異本が二種あつて、一方は盆天国と書き、同じ筋でも文章は異なる。中納言高則が、その孝行を感心されて梵天王から貰つた妻を横取りされた後に取りもどす物語で、成相（なりあい）観音と切戸（きれと）の文殊の縁起物語（いずれも京都府宮津市）。

\*那須与市船遺恨（ふねいこん）―一段。

\*紫野合戦（むらさきのかつせん）―六段。「八幡太郎誕生記」と「四天王紫野合戦」と殆ど同文である。筋は八幡太郎の誕生物語に、旭將軍師氏の三男氏益が叡山の衆徒と結んで、四天王の不在につけこんで叛逆し紫野で頼義等が自害しようとした時、頼光の亡霊が現われ、帰つて来た四天王と共に氏益を滅ぼす物語。

\*湯殿山大権現御本地記―六段。「金体両天（こんたいりょうてん）大日御伝記」と同文で、湯殿山大権現の縁起と弘法大師の湯殿山開山の物語とを合せた物語。

\*百合若（ゆりわか）むくり退治―七段。「百合若大臣」の改作で、百合若がむくり討伐の折、その臣別府兄弟が主人の家を横領する物語。

\* 頼光跡目論(らいこうあとめろん) — 六段。古浄瑠璃「頼光跡目論」と殆ど同文であるが、頼光の臨終に塩釜の塩汲みの場を見せるところがあり奥浄瑠璃で喜ばれたものか。

\* 頼光山入(よまいり) — 六段。「酒呑童子(しゅてんどうじ)」と同文のもの。

\* 鰐山兵部(わにやまひょうぶ) 一代記 — 五段。妻女横領型の金平物の一。

\* 一ノ谷 — 五段。「源平盛衰記」によつたもので、一ノ谷の戦の全般を述べている。三草山(みくさやま)の戦・鴨越間道越(ひよどりごえかんだうごえ)・生田ノ森(いくたのもり)の戦・鴨越の逆落・平家の敗軍・重衡捕われ・忠度戦死等。

\* 伊勢三郎義盛見参(いせのさぶろうよしもりげんざん) — 一段。土佐節「源氏十二段(げんじじゅうにだん)」中の伊勢三郎が義経に初見参する場。

\* 牛若東下り — 三段。「十二段草子(じゅうにだんそうし)」の改作。

\* 烏帽子折(えぼしおり) — 三段。内容も詞も舞曲「烏帽子折」と似ている点が多く、両者に密接な関係のあることを思わせる。

\* 熊井太郎孝行卷(くまいたろうこうこうのまき) — 六段。

\* 鞍馬破(くらまやぶり) — 三段。常盤が鞍馬の掟である女人禁制を破つて登山し、牛若を寺に託する物語。

\* 常盤御前鞍馬破 — 一段。鞍馬破の異本。

\* 源氏十二段 — 六段。土佐少掾「源氏十二段」と同じ。

\* 牛王姫(ごおうのひめ) 問定 — 六段。「牛若千人切(うしわかせんにんぎり)」の改作で、牛王の忠節物語。表現が如何にも奥浄瑠璃的に改変されている点注目すべき。

\* 勢田合戦(せたかつせん) — 八段。「源平盛衰記」によつた物語。勢田の戦を中心に義経に追われた平家が石山(いしやま)に退く戦記で、佐藤継信・忠信の功名が出ている。

\* 尼公物語(あまぎみものがたり) — 五段。

\* 八島合戦(やしまかつせん) — 一段。

\* 八島 — 一段。

右の三篇は謡曲の「接待(せつたい)」を敷衍したものでその筋は、頼朝と不和になつた義経が弁慶等臣下十二人と山伏姿になつて平泉を指して落ちゆく途中、信夫の佐藤庄司の館に宿つて庄司の後家尼公に会う。尼公はわが子継信・忠信が義経に随身した次第を語り、弁慶は継信が八島の戦で討死した状を語る。「八島合戦」と「八島」とは継信討死の条だけを一篇とした異本。

\* 那須与一扇的 — 二段。「源平盛衰記」に根拠をもつ八島における那須与一の高名物語。

\* 直垂(ひたたれ) あぐち(開口) — 一段。常盤が牛若に与える直垂の物語で判官物の一。

\* 伏見(ふしみ) 常盤 — 六段。伏見にて宗清のために常盤が救われた物語で、舞曲の「伏見常盤」によつたもの。

\* 弁慶管弦(かんげん) サマシ — 六段。景清に捕らえられ四條河原(しじょうかわら)で殺されることになつた弁慶が酒を要求し、元氣を出して綱を切つて逃げ出すという滑稽物語。

\* 丸山物語(まるやまものがたり) — 六段。出羽国丸山の佐藤庄司の死後、継信の子吉信、忠信の子吉忠が秀衡の子の泰衡に攻められ、尼公と共に菩提寺の彌勒寺に遁れたが、捕らえられて鎌倉へ送られ、頼朝に仕えることを勧められ、泰衡を伐つことを条件として頼朝に服従する。

鎌倉勢は奥州に向い、伊達大木戸で泰衡を討ち両人も功名を立てて、吉信は出羽十郡を、吉忠は越後国を賜り尼公に報告する。頼朝の義経に対する誤つた態度を利用して、戯曲化した点に特色がある忠誠物語。異本に「丸山合戦」「円山合戦」がある。

\* 奥州一宮本地実録(おうしゅういちのみやほんじじつろく) — 十二段。塩釜

神社の縁起により、功名盗の復讐物語に奇蹟的伝説を取りつけたもので、そこに地方的特色が見られるが、古浄瑠璃の趣向が濃厚である。「塩釜御本地」「奥州一宮御本地由来之事」「奥州塩釜本地実録」等の異本あり。

\*奥州笹嶽(ののだけ) 本地―六段。「田村三代記」の後日物語。

\*御山(おやま) 本地―一代記―十段。「奥州岩鷲山(がんじゅさん)権現縁起」

で「田村三代記」の別種の続篇である。利仁が鬼神を平げて岩鷲山大夫権現として祭られる物語で地方物語である(岩鷲山は岩手山のこと)。

\*小佐治(こさじ) 物語―六段。京都の北白川梅津少将重成の二男重定は実母に死別れ、名を小佐治と改め虚無僧となって諸国修行に出て奥州名取郡の桑島長者の家に宿る。長者の娘幾世は小佐治を見染める。

小佐治が辞した後、幾世は彼の飲み残した茶を飲んで懐胎し男子竹若を儲けたが、小佐治を恋慕う余り病死する。翌年幾世の一周忌に小佐治は修行の途再び長者の許に立寄り子細を聞いて、竹若を扇であおぐと茶の泡になって消える。幾世の墓所の大念仏の中で小佐治は自害する。この物語は名取郡地方の伝説を元にした地方色豊かな世話物である。異本に「小幸(ここう) 物語」「桑島(くわじま) 物語」があり、小佐治と幾世の墓碑と称するものが、現に同郡名取町(現名取市)高館川上に立っている。

\*御所的(ごしよのまと)―五段。秩父六郎重保と梶原源太景季の兩人が座敷の遺恨から不和になったが、頼朝は若宮の弓初に兩人に弓の勝負をさせて、それによって座敷を定め恩賞を行おうということになった。弓初に先立って六郎が父重忠の試みをうけ教訓を蒙むことや、六郎と相思の仲である源太の妹丹後ノ局が六郎のために若宮に祈るところがある。愈々弓の当日になって兩人の勝負はなかなか見えなかったが、夜のようになって遂に六郎が勝ち、君の恩賞を賜る。弓場の模様や

競射の光景が特に詳しく面白く描かれている。これは曲中殺伐の所がないためか、旧藩時代に毎年正月二日浄瑠璃語りが仙台城中に召されて君公の前で語ったものであったという。

\*寛文(かんぶん) 物語―八段。

\*伊達盛衰記(だてせいすいき)―四段まで。

この二篇は同文の異本で伊達騒動の物語。

\*宗勝逆臣(むねかつぎやくしん)―二段。

\*兵部(ひょうぶ) 物語―十五段。

この二篇も伊達騒動物で「寛文物語」の一種。

\*大日如来伝記―六段。奥州宮城郡国分福岡村(泉町)(現仙台市泉区)にある笈分如来(おいわけにょらい)の縁起で、対面玉という不思議な玉の物語。文句に誤脱が多く段階も纏まりなくながれ、古浄瑠璃の模倣による仙台地方特有の物語。

\*田村三代記(たむらさんだいき)―五段、六段、八段の三種がある。田村将軍利春・利光・利仁の三代にわたる勇武物語。御国浄瑠璃の中で最も好まれた物語で、奥州三観音の縁起でもある。

\*三代田村―九段。

\*二代田村―八段。

この二篇も前と殆ど同じ内容の物語で、二代田村は利光・利仁の二代にわたる武勇ものがたり。

\*檀毘尼長者本地(だんびにちやうじゃほんじ)―五段。長者が申子をして姫を得、長者号を得て夢のように死ぬるいう、大日堂縁起による。

\*迫(はさま) 合戦―五段。登米郡赤生津村(現豊里町)の月輪香林寺縁起によったもので、寛文頃から甚しく流行した妻女強奪物語を地方色豊かに創作したもの。

\*餅(もち) 合戦―一段。餅づくしの滑稽曲。

\*宇治川(うじがわ)―五段。義経が義仲を討伐し、義仲が粟津で戦死するまでの経緯を叙したものを。要するに「源平盛衰記」による宇治川合戦記である。

\*佐々木大鏡(ささきおおかがみ)―八段。蒙古の婆蘭大将軍時勝という悪党が、藤戸の対岸の大鏡という所に渡って来て寇をするので範頼が討手に向う。佐々木高綱の兄盛綱が藤戸の海の浅瀬を塩焼藤太に聞いて後、秘密を隠そうとして藤太を殺し、先陣して大鏡に渡り、時勝を討った功により肥後国を賜る。藤太の妻女は夫が殺されたのを恨むが、盛綱は後にこれらを安楽に暮させ、藤太の木像を作って祀るので、近松の「佐々木大鑑」の改作と思われる。

以上挙げたほかに、外題だけ知られて現物の全く見当たらないものも若干ある。

(註) 仙台浄瑠璃の演目について、大槻文彦の「仙台浄瑠璃の考」と比較すると、『県史』の方が多く紹介しているが、大槻論文に見えて『県史』に見えないものを挙げると以下のようになる。「奥州前九年」「天神記」「子持山姥」「勸進帳」「義経軍功記」「堀川夜討」「佐代の中山霊験記」「鎌田最後(政清)」「新羅十二代記」「唐紙忠心記」。

極めて簡潔な記述であるが、仙台浄瑠璃の概要、特にその演目を知ることが出来る。奥州藤原氏は所謂判官物と呼ばれる中に出てきている。しかし、注目すべきは、その演目の幅の広さと、地方的主題を多く含むその奥行の深さであろう。旧仙台藩領内の地方の隅々まで行き渡っていたことがわかり、仙台浄瑠璃が地方の庶民文化の一翼をになっていたことが推定できる。

### 三 『仙台市史』の記述

次に2008年(平成二十)三月発行の『仙台市史 資料編9 仙台藩の文学芸能』中の「三 その他の芸道」を見ておく(○は原文)。

#### 「1 奥浄瑠璃

仙台藩領に伝わった奥浄瑠璃(仙台浄瑠璃、御国浄瑠璃)は、主に盲人が担い手であったとされ、古い形の浄瑠璃が残されたものとされている。この奥浄瑠璃には「かほ一節(こういちぶし)」「重一節(じゅういちぶし)」「丈察節(じょうさつぶし)」「喜右衛門節(きえもんぶし)」の四流があったとされ、ここで紹介するのは、「丈察節」を習得した赤井沢龍之一(市)の語りである。龍之一は、名取郡高館熊野堂村(現名取市)の生まれ。七歳で失明し、按摩鍼灸でくらしを立てながら、赤井沢秀奥に音曲を習った。「丈察節」の奥浄瑠璃のうち、一三種が語れ、後に姓を小田島から赤井沢に替え、名取郡長町(現仙台市太白区長町)に住み、秋保温泉などで活動していたという。大槻如電・文彦らは年老いた龍之一の技が途絶えることを憂い、東京音楽学校(現東京藝術大学)に依頼して、東京で一流の邦楽関係者に、龍之一の語りや音律等を詳細に調査することになり、明治四十三年(1910)十月、娘とともに上京させ、演奏させた。この時に龍之一が演奏したのは、「丈察節」から「八島」と「御所の的」、「唐紙注進記」の三番と、「かほ一節」の「天神記」、「喜右衛門節」の「太閤記」の五番で、後二者は龍之一へ頼み込んで真似て語ってもらったのだという。これらのうち、丈察節の「八島」と「御所の的」が蠟管に録音され、さらに六人の調査員によって様々な点から批評され、研究された結果は「奥浄瑠璃合評」としてまとめられ、大槻文彦の解説「仙台浄瑠璃の考」とともに、明治四十四年に『音楽』第二号第二巻に報告された。これは昭和四年(1929)には小倉進平の「御国浄瑠璃」とともに、『仙臺叢書』に再録され、仙台の人々に紹介された。この東京での公演が話題になり、仙台でも明治四十四年一月十七日に五



城館で「仙台浄瑠璃会」が開かれ、約二〇〇名の観客が赤井沢龍一の語り聴き入った。料金は二〇銭だったという。龍一が語ったのは東京音楽学校での語りと同様の「八島」「天神記」「御所の的」「太閤記」「唐紙忠心記」の五段であった（『河北新報』）。

この公演の後、各地の語り手が発掘され、石巻町の鈴木幸龍、志田郡松山町の小川清勇、桃生郡矢本村の石垣勇栄などが「御国浄瑠璃の新顔」（『河北新報』明治四十四年五月二十九日付）として紹介されている。

ここで翻刻紹介するのは、赤井沢龍一が語った「八島」である。明治四十四年十月に大槻文彦が書き留めた聞き取り原稿を、昭和四年十月に小倉博が書き写したもの（個人蔵）。縦二五・〇cm、横一七・八cmの原稿用紙一枚（表紙とも）にペン書きされている。ただし、原稿そのものに数カ所の省略部分があり、龍一の語った「八島」全体を知るものではない。本原稿の所在は以前から知られていたが、未発表のものであった。

この「八島」は、源義経に従っていた佐藤継信が讃岐国屋島で戦死した様子を切々と謳い上げる名曲である。なお、前述の東京音楽学校で録音された龍一の「八島」と「御所の的」については、蠟管が六本分残されている。その中から比較的状态により「八島」の一節を録音した蠟管一本分を付録DVDに収めた。また、龍一の語りとしては他に「御所の的」などが小倉博により活字化されている（下略）。

明治四十年代の録音資料の存在に触れるなど、短文であるが興味深い内容である。

#### 四 『胆沢町史 XI 民俗編 4』の記述

次に、『胆沢町史』（1994年（平成4）10月 胆沢町発行）の小形信夫（おがた・のぶお）氏の記述を見る。「第2章 娯楽芸能 第二節 浄瑠璃と人形浄瑠

璃」である。大槻論文を基礎に、地域の様相を詳細に追っている。

▼（大槻論文を要約した上で）「（上略）源流は古浄瑠璃で京都の影響があつても、流行の過程で各地方色を編み出したものが、仙台から伊達領内に入り、更に伊達領の風土に合った独特の東北訛りそのままのものを作りそれが於国浄瑠璃または御国浄瑠璃と記録されている。江戸ではこれを奥ノ浄瑠璃（奥州の浄瑠璃）と呼んで区別していた。胆沢地方ではジョロリコとも言つたようである。」

▼「盲目僧の存在」菅江真澄の日記「かすむこまがた」天明六年（1786）二月廿一日の条に「某都（なにいち）・某都（くれいち）」とて兩人（ふたり）相やどりせし盲瞽法師（めしひのほふし）、三絃（さみせむ）あなぐりいでて、ひきたつれば云々」と見える。

この某都は盲瞽法師だという。胆沢郡内にも浄瑠璃が盛んで、各村の御検地帳を見ると、寛永十八・十九年（1641・42）頃に、西根（にしね）村（現金ヶ崎町西根）に座頭長都（おさいち）、永徳寺（えいとくじ）村（現同永栄）に座頭清都（きよいち）、塩竈（しおがま）村柳町（現奥州市水沢柳町）に座頭門都（もんいち）が居り、寛文二年（1662）には下衣川（しもころもがわ）村（現奥州市衣川）に座頭満都（まんいち）が、また寛文五年（1665）年には中野（なかの）村町屋敷（現奥州市真城中野町屋敷）に座頭松都（まついち）が居たことがわかる。

▼仙台市長町（ながまち）に住む御国浄瑠璃の語り手の老盲 赤井沢龍一（りゅうのいち）を、明治四十三年（1910）十月、大槻文彦博士が東京に招いて演奏させているが、寛永十九年頃（1642）、西根村に座頭りゆと一が、承応三年頃（1654）、中野村に座頭りゆうちんが住んでおり、「龍」の系統と推考される。

▼検校以下の盲人は城方（じょうかた）と一方（いちかた）の二つに大別し、城方の者は名に「城」の字をつけ、一方の者は一・市または都の字を用い

るを風習とした。(中略)座頭は江戸末期には琵琶・箏・三味線などを弾いて唄を歌い、語り物を語った。中には、塩竈村の座頭長春のように、按摩・鍼治を業とする者もあった。(中略)また、盲目の女性の瞽女(こぜ)は琵琶・箏・三味線・梓弓などを弾いて唄を歌い、語り物を語った。(下略)

▼同じ「かすむこまがた」二月六日条に「六日 あしたは春雨めきて、夕月ほの霞て出ぬ。琵琶法師来りぬ。是も慶長のむかしより三線(さみせむ)にうつりて、猫の皮も紙張の撥面(ぼちめん)に化りたるが多し。曾我・八島・尼公物語・湯殿山ノ本事」あるいは「千代(ちよ)ほうこ」といふ女の戯ものがたりなどのかたれり」とある。伊達領北上川上流の胆沢の曲節は、力(りき)がこもり抑揚に富み、語韻のゆすりも趣が深く、北上川の下流石巻の曲節は低く平板で、上声を多く使い、趣を異にしたという。衣川村増沢より胆沢町若柳の上横沢原に移住した佐々木氏は、竹生島御本地・熊谷先陳(陣)問答・熊坂長範・八嶋合戦・鞍馬破り・義経東下り・田村三代記などを亡父より教えられているが、その節は於国浄瑠璃(奥浄瑠璃)とされていた。(中略)

▼盲目の僧侶は江戸時代初期には幕府の「盲僧法度」による支配統制を受け、又、各藩も幕府に見習って盲僧盲女の保護を図ったと考えられる。しかし、伊達藩におけるその詳細は明らかにされていない。一般に里山伏(さとやまぶし)・神子(みこ)は藩統制による山伏組織があつて一般人とは区別され、別途に宗門改帳に書き上げられるが、盲僧の宗門帳は今のところ見当たらない。しかし、伊達藩の盲僧組織の基礎は当道座の盲僧組織にあつたのであろう。藩組織下にある盲僧は藩御用の祈祷に奉仕するほか、民間宗教者として村々に定住して法会・廻壇・地鎮祭・建築儀礼などの際に司祭者として御願円満・息災延命を祈祷し、また、卜占・治病祈祷などの巫者的宗教機能をもって民衆と結びついていた。さらに、芸道に励み、平家琵琶をよくしたが、伊達藩の盲僧は奥浄瑠璃を弾き語りしていた。

▼仙台地方を中心として定着していた奥浄瑠璃は古浄瑠璃の面影を残して近年まで伝承されていた。三味線伝播以前の浄瑠璃は琵琶や扇拍子で語られていた。芭蕉の『奥の細道』には琵琶で奥浄瑠璃が語られていたという記述があり、元禄の頃は未だ琵琶が使用されていた。天明年間に菅江真澄が胆沢郡で見聞した座頭の奥浄瑠璃は紙張りの三味線を弾いていた。

伊達藩では宝暦頃(1751~64)城札節・かほ一節・重一節が生まれ、天保頃(1831~45)城札節から喜右衛門節が生まれ、さらにかほ一節から濁沼節が生まれたという。奥浄瑠璃の最後の伝承者となつた一関の北峯一之進(きたみね・いちのしん)が伝承していたのは、これらとは別の胆沢節(いさわぶし)とか川上節(かわかみぶし)と言われるものであつた。(中略)

▼明治維新で盲僧に関する制度が廃止・変更され、生活の困窮をきたしたが、明治十三年(1880)に至つて、天台宗入法の盲目の者に限り徒弟制度が復活し、伝業出来るようになった。改正盲僧規則の趣旨は、各地方の天台宗寺院によつて得度受戒を得ること、その上で地神経・心経・荒神咒を必修すること、回国修行、土用祈祷、琵琶を弾くことは従前どおり、などであつた。岩手県における盲僧事務所に中尊寺、同宗務所に毛越寺がその任に当たつた。(中略)

ちなみに、明治十三年の盲僧組織に、胆沢郡の触頭に佐々木秀ノ一の名があるが、この人物は北峯一之進の師高橋精悦の更に師に当る秀ノ一と同一人物と思われ、奥浄瑠璃が北上川下流の石巻地方を川下節(かわしもぶし)と呼ぶのに対し、上流の水沢地方を川上節(かわかみぶし)と称せられ、いわゆる胆沢節を確立した名手で、多数の弟子があつたと北峯は口述している。

この後も様々な苦難の波を受けた盲僧・盲女は大同団結し、昭和十三年(1938)に新たな宗教団体「天台大和教」を、更に太平洋戦争後の昭和二十七年(1952)に「大和宗」を結成し、東磐井郡薄衣(現一関市川崎町)

本山大乗寺を創設し、初代管長に米倉如山（よねくら・よぎん）が就任した。なお、一関の奥浄瑠璃の伝承者北峯一之進は大和宗の財務部長や事務総長を勤め、また盲目の妻てつの師匠は米倉如山であった。一之進は「田村三代記」（初段・二段）・「牛若丸東下り」（初段・六段）・「黒白餅合戦」などの浄瑠璃曲詞を書き留めている。（中略）

▼このように於国浄瑠璃は、竹生島御本地のような古浄瑠璃が仙台へ入り、地元の伝説も加えて独特の曲節で語られたほかに、「餅合戦」などのような地方特有のもので構成されている。再述になるが、菅江真澄の「かすむこまがた」天明六年（1786）二月廿一日の徳岡村村上家における記述が、そのような状況を物語っている。即ち、

「（上略）日暮れば某都（ナニイチ）某都（クレイチ）とて兩人（フタリ）相やどりせし盲瞽法師（メシヒノホフシ）、三絃（サミセム）あなぐりいでてひきたつれば、童どもさし出て、浄瑠璃（ソウルリ）なぢよにすべい、それやめて、むかし〜語れといへば、何むかしがよからむといふに、いろりのはしに在りて家室（イヘトジ）のいふ、琵琶に磨臼（スルス）でも語らねか。さらば語り申（モツ）さふ、聞たまへや。「むかし〜、どつとむかしの大（オホ）むかし、ある家に美人（ヨキ）ひとり娘が有（アツ）たとき。そのうつくしき女（ムスメ）ほしさに、琵琶（ビバ）法師此家（ヤ）に泊りて其母にいふやう、（下略）」

明治以降、胆沢町内では小山の下恩俗（しもおんぞく）の及川氏の父や、東磐井郡から来た盲人（ぼさま）は三味線を弾いたり、時々扇子や拍子木のような叩き棒で演題を叩きながら音調を節し、曲節のある口上を演じたという。また、衣川村増沢の佐々木氏は何も鳴らさず曲節のある口上を演じていたが、これも浄瑠璃といわれていたという。」

小形氏の論考は、胆沢地方の仙台浄瑠璃の具体相を示すものとして貴重

なものである。次に、小形氏も触れており、最後の継承者といわれた北峯一之進について整理しておく。

#### ▼北峯一之進について

\* 『20世紀日本文人名事典』2004 日外アソシエーツ―北峯一之進（精悦）1889〜1973年、明治〜昭和期の奥浄瑠璃の伝承者。

秀之一を師とし、胆沢節を伝承。1961年（昭和36）記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選定される。演目は「田村三代記」「牛若丸東下り」ほか多数。

\* 『日本大百科全書』小学館―奥浄瑠璃 浄瑠璃の一種。奥羽地方の

伊達・南部両藩に伝承されていた浄瑠璃。現地では「じよるりこ」とも呼んだ。「お国浄瑠璃」「仙台浄瑠璃」ともいう。

源義経の東下りを題材にした作品が多く、初期には扇拍子で語られた。塩釜でこれを聞いた芭蕉は、「法師の琵琶をならして奥上ると云ものをかたる。平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子云云」と『奥の細道』に書き留めている。伴奏楽器はいつの頃にか三味線に変わったが、法師たちは各地で「牛若丸東下り」「田村三代記」「黒白餅合戦」などを演じた。

昭和初期には伝承者も減少し、宮城県では桃生郡矢本町（現東松島市）の石垣勇栄（1862〜1931）、石巻市の鈴木幸龍（1881〜1947）、岩手県では一関市の北峯一之進（1889〜1973）、西磐井郡花泉町（現一関市）の佐藤良伯ら数人が名を留めるのみで、現代では伝承が途絶えた。

なお、1933年（昭和8）から記録され始めた鈴木幸龍の演奏が、小倉博編「御国浄瑠璃」（1937 斎藤報恩会）にまとめられている。

\* 森口多里氏によるインタビューの録音。話者は北峯、質問者は森口である。「北峯一之進 明治22年2月23日、平泉町毛越寺生まれ。母は毛越寺生まれで、代々祈祷をなす家系であった。14歳で父が、16歳で

母が亡くなり、お寺（梅本坊）で世話になって成長した。14歳の時に失明し、一関中里の祈祷・占い・浄瑠璃をする家に弟子入りし、師匠の高橋玄明のもとで18歳まで修行した。師匠の死後は兄弟子についた。

高橋玄明は、奥浄瑠璃の流れでは、水沢の名人秀之一の流れ（秀之一節）といったであった。修行の中身は揉み療治もあったが、祈祷・占いが主であった。師匠は北岑の筋のよさを見抜いて、奥浄瑠璃の指導に力をいれ指導した。師匠より習った曲は「東下り」「屋島合戦」「那須与一」「田村三代記」「葛の葉子別れ」「和藤内」「天神記」「掃部長者」「高館落城記」「木幡落ち」「餅合戦」「用明天皇草刈り山路」ほかである

\* 「民謡・童唄調査記録テープ25」―佐藤良伯の奥浄瑠璃「菅原天神記―いざよいの場―」「田村三代記―親子対面の場―」対談 佐藤良伯と森口多里

## 五 北峯一之進筆録の浄瑠璃台本

北峯が記録したものを、旧胆沢町小山在住の菅江真澄研究者、故佐藤英男（さとう・ひでお）氏が謄写版印刷した資料があるので、ここに紹介する。（ルビは原本、他は引用者）

「表紙）北峯一之進（精悦）記 奥浄瑠璃台本「黒白餅合戦」「牛若丸五段目 熊坂長範盗人の段」 佐藤英男写筆（胆沢町小山十字文字）

### ▼奥浄瑠璃台本 1 黒白餅合戦

抑々（そもそも）黒白米戦の年号は、天保九年（1838）矢館の年、春は三月三日雛の節句の事なるに、爐（いろり）ケ城の門前に、大いなる問答出て来り起りは何と尋ぬるに、白子の餅と黒子の餅の座敷論とぞ聞いける。白子の餅は黒子の餅に打ち向い、如何に黒子殿、汝は黒き身分として、度々

高座をするが、吾々大いに腹を立ち、罷（まか）り下れと叱りける。黒子の餅はにつこり打ち笑い、何んと曰はれても白子殿、白い黒いは人間業（ワザ）。元を貞（タダ）せば同じ沢辺の姫蔓（ツル）なるぞ。去り乍ら、事に譬（たと）へて聞き給ひ。雪と言ふ字も墨で書く。神や仏の御姿も墨で書くでは無いかいな。此の黒子の餅は、色は黒く生まれても、皆様方の御話には、堅い／＼と賞美され、小豆の小袖や豆腐の白衣を着る時は、白い黒いは無き者ぞ。左程意（遺）恨と思ふなら、五月節句じやなければ共、勝負の上でと罵りて、戸棚ケ城を差してぞ帰らるゝ。

白子の餅は大いに腹を立て、数多（アマタ）の郎党召し集め、如何に方々黒子の餅は何様（かよう）／＼の雑言なり。是より急ぎ戸棚ケ城に襲寄（オシヨ）せ、黒子の餅を初めとし、数多の餅共からめ取り、爐ケ城の門前にて、鍋入れ釜入れ串差しのならし者、又、火箸兄弟、渡金（ワタガネ）々助（カネスケ）等に命ず、火あぶりの罪科を行ふべし。早く／＼と仰せける。先づ一番に正月元日鏡餅、二月卯の日の弓取り餅、三月三日の雛の餅、四月八日の薬師餅、五月五日の節句餅、六月朔日（ついたち）歯堅餅（はがためもち）、七月中旬（チカバ）の盆の餅、八月朔日の八作餅（はっさくもち）、九月末ばの刈上餅、十月二十日の恵比志餅、十一月中の五日の油しめ餅、十二月末ばの年取餅。家を建て、のぐし餅に、神の前なる御供餅、祝儀の座敷で引き餅に、祝の数は多けれど、十九の年を初めとし、八十八の祝の餅、寒中生れの氷餅、金持、俵餅、身上持、長持等を初めと、其の勢一千余騎とぞ見へにける。

是は扱（さて）置き、茲（ここ）に又、白子の餅の分家には、小鍋ケ城主、雑煮の柔（ヤワ）助、此の由を見るよりも、此の上は急ぎ味方を掻き集めん走（ハ）せ来（キタ）らんと呼ばれば、先づ一番に椎茸の七郎、芹（セリ）の八郎、八百屋育の牛蒡の判官、大根太郎に、人参赤助、豆腐の焼右工門、混（濁）にやくの武留工門、鯉の出（タシ）助、鮭の子五郎、十五浜で育つ

た多ごの入道を初めとし、数多の雑煮(ソーニ)を引き連れて、味方に走せ来りしは、勇ましかりける次第なり。

扱て、是を聞いたる戸棚ヶ城主黒子の餅は、此の由を見るよりも、急ぎ味方を集めんと、一々皆ん(な)に語らるゝ。此の由を聞くよりも、急ぎ走せ寄る者共、先づ一番に佐世の中山飴で餅、西坂本の蕨(ワラビ)餅、猿ヶ萬(馬)場の柏餅(愛知県豊橋市付近)、二丈錦の法師餅、弁慶さんの力餅、春の初めの蓬餅、奥山育(ソダチ)の牛蒡葉餅、菘にからまるぶどう葉餅、必ず他人に呉(クレ)ない餅、栗(クリ)餅、柿(カキ)餅、きみ餅、栗(アハ)餅、ひえ餅、小麦餅、菱餅、ところ餅、庭はきだめのくだけ餅、豆腐からのきらず餅、とづ餅、すだみ餅、松皮餅迄出でにける。御膳の組の一番は、小豆の餅を始めとし、くるみ交りの豆腐餅、豆で御座れやきな粉餅、秋の初めのじだ餅に、白黒交りのじうね餅、味噌餅、ごま餅、醤油餅、雉(キジ)餅、鰻(エビ)餅、鎌倉餅、なましの餅に、生我(生姜)餅、びり／＼辛いなんばん餅、鼻をはづくは辛し餅、田楽餅に大福餅、そばをねつたるそばかい餅、白(ウス)きぎいらすのお萩餅、若いお人の焼餅に、身持に兎持を初めとし、御手持、針持、心持、寺持、鍵持、旦那持、虫持、痰(タン)持、疝気(せんき)持、土の底なるもぐら餅、納(ナン)戸の島このおぼこ持込で初めとして、都合其の勢八百余騎、爐ヶ城に襲(オシ)寄せて時の声を上げにける。

是は扱置き茲に又、畠山の住人納豆の小太郎糸髯(イトヒゲ)は、一昨日(オト、エ)の昼間より糠屋(ぬかや)の中に昼寝してこそは至りしが、時の声に目を覚し、糸げの甲(ヨロエ)をざつくと着。塩から兜の緒をしめて、小皿の馬(コマ)に打ち乗り、白簪兄弟先に立て、生(ナマ)すのすか助共(供)に連れ、御膳の馬場に乗り出で、声を上げてぞ呼はつたり。今日は三月三日雛の節句の事なるに、御台理様の御前にも憚らず、斯る争動を起し、上を恐れぬ奴ばらなり。人はともあれ、斯もあれ、からめ取らんと呼ばはれ

ば、白簪兄弟畏れ候と、白子の餅と黒子の真中取つて、かい挟み、糸髯(ヒゲ)前にぞ差し出し、納豆の小太郎、心得たりと、手取り、足取り、やがて繩を掛け、城中にぞ渡るさるゝ。

城中で受取は、先づ一番に、前歯のまぐ太郎、二番の奥歯の奥太郎、三番に舌の弥太郎等が受取りて、平家方では無けれ共、咽(のど)の細道たどり／＼て、六原の御所にぞ落るゝ。

#### ▼奥浄瑠璃台本 2 牛若丸東下り 五段目

#### 熊坂長範 盗人の段

其の後、熊坂長範、此由を見るよりも、四人の兄弟を近かぢけて、如何に方々、小狐何んと成しぞや、早く寄せよと指図(ケツ)をなし、内に入るのは、七十五人、軒端に廻るのは七十五人、遠垣外(タウガキソト)も守るべし。内より外(ソト)への相図の言葉(コトバ)も在る者ぞ、是れも能(よく)覚えべし。肴(サカナ)々と呼ぶ時は、車松明火(クルマ・タイマツ)を一度ばつと投げ込むべし。花が散る／＼と呼ぶ時は、一度にどつと逃げ散るべし。未(まだ)夜は深しと呼ぶ時は、内で覚悟しべす。時はよしと呼ぶ時は、一度にどつと乱れ入り取るべし。降る雨／＼と呼ぶ時は、七十五人の弓取りは、矢先きを揃えて放すべし。時刻／＼と呼ぶ時は、五百人の夜盜共切先揃えて切り込むべし。相図の言葉是(コレ)計り。

夫(ソレ)よりもイヤツルが智略にて斯様／＼と通信来たり。熊坂大に悦び、能(よ)き幸(サイハ)ひと、皆々押し寄せよ、重郷が家の表より、裏迄押(オシ)寄せ、取り巻き、棒突き鳴し、陸地を踏んで、鯨波(トギ)を志ぐらに、こそは揚げにける。吉治兄弟三人も、時の声に目を覚ます。周章(アハテ)ふためき起き立で、刀掛を見てやれば、大小皆々イヤツルに仕舞(シマワ)れて、手向ひしる様もなかりける。えい、イヤツルにたばかられたり、後悔しけれ共、先きに立(タ)ぢ、逃げて助かれ者共と、裏の林に這へ込み、逃げにける。七十五人の友(供)人(ともびと)も、主人吉治は、あれ程の

宝を捨てて、命を悲(おし)み逃げけるに、増して吾々宝は持たず、逃げて助かれ俱々(トモドモ)と、七十五人は跡(あと)をも見ずに逃げて往(ユ)く。心強くも若公(ワカギミ)は、御一人残らせ給ひて、えいクマ手足にからまる者なしと、障子の透間(シキマ)より見給ひば、大将と思(オボ)しき者、齒先き八寸黒鉄(クロカネ)の、一つ齒足駄をはえたるを見て、夜盗だに足駄をはえて寄せ来るに、吾も足駄をはかんとて、唐銅(カラカネ)一つ齒足駄に唐系(カライト)の緒をたて、友切丸(ともきりまる)に金念道(こんねんどう)(古年刀)をはく儘(ママ)に、一間(ヒトマ)緩(ユル)々と開き、やあ、鯨波(ドギ)を上ぐるは何者ぞ、大将を名乗れと呼はつたり。えい、小口(コシヤク)を走(ハシ)らす冠者哉な。主人吉治は逃げると見へしが、汝も逃げて助かれ、冠者如何にと言ひければ、若公(ワカギミ)聞召(キコシメ)し、主人吉治が逃ぐる共、吾は宝の番に附かせられ、逃げて助かる様あらん。只尋常には渡さん、天命ならば渡しべし。寄せて取れやと翔(カ)け出でたり。熊坂見るより肴(サカナ)々と呼れば、七十五本の松明火(タイムツ)を一度に突(バ)つと投げ込めば、重郷が家は只猛火に成りける。若公心得たりと、神通霞の法にて払ひければ、一度に突つと消へにける。重ねて肴(サカナ)々と呼ばれば、又、松明火(タイムツ)を投げ続ける。若公は神通のむぢ(鞭)にて払ひば、一度に突つと消へにける。熊坂見て、えい、肴絶(サカナタ)やしの小患者(こかんじや)かな。歳末(チメ)肴(サカナ)と呼ばれば、車松明火の法を結んで投げければ、若公は、神通霞の法にて、右(ユンデ)を払ひば、左(メテ)に炎(モエ)立ち、左を払ひば、右に炎立ち、右左(ユンデメテ)を払ひば、天に登つて一通(トウ)り、又下(くだ)りて一通り。地に落付くは一通り、三階車に成つて炎ひ立つたり。さしがに孟(タケ)き若公も惘(アキ)れ果る計(はかり)なり。えい、鞍馬山の僧正が方にて習ひ覚へし水の法を結び、左右に投げければ、一度に突つと消ひにける。流石(さすが)の熊坂も惘れ果てて、降る雨と呼はれ

ば、七十五人の弓取りは矢先きを揃へて放さる。若公心得たりと、天に来る矢は友切丸、中に来る矢は金年刀(こんねんどう)、地元に来る矢は足駄を以て受け流し、はらりと受け流せば、降り来る雨に風の添はる、如く、一本も内には入らず、皆縁の下に切り落せば、七十五人の弓取りも、矢種は尽きぞ見へにける。熊坂惘れ果てて、表の小路にさつと引き、扱て又、五百程寄せ来り、冠者一人(ヒトリ)に討負(ウチマ)け、暗々(くらぐら)と帰るも、余りにも口惜き次第やと、時刻の法にて、戦つて見早(みば)やと思ひ、時刻と呼はれば、五百人の夜盗共、切先き揃えへて切つて来る。若公御覧んじ、是とそ得手の道と、真つ向に掛け、手向ふ敵をば真向ふ切り、逃る敵をば宇(ウツ)様切り、涌四(ウクヨ)つ立て水車(ミツクルマ)、乱火(ランビ)乱会(クワイ)虎(トラ)走り、討つて廻れば面白し。斯(カカ)る事は始めて、兵法の奥義を心見(試)んと、先づ方法を考へて、戦ひ見やと思召(オボシメ)し、神の前には参拜切り、仏の前での礼拝切り、不動の前での独站(ドッコ)切り、波の上での捲(マク)り切り、屏風(ビヨウ)の上での疊み切り、疊の上での縁(へ)り返し、袖の下での忍び切り、川原柳(カワラヤナギ)の元末(モトウラ)放し、末葉(ウラハ)残り無く靡(ナ)びかず。右(ユンデ)に七太刀(チナタチ)、左(メテ)に七太刀、左右は切(キラ)んぞ、斯(コ)ふこそ切るぞと、曰(ユ)ふ儘(ママ)に、上る太刀、下る太刀、無駄太刀なくぞ切りにける。何かは以てやまるべ、五百人の夜盗共、暫時(サンジ)忽(タチマ)ち討れける。小路は死がいの山と成り、水(ミヅ)、流(リウ)々として血の池の如く也。此の若公の御働き、見る人聞く人、誉めぬ者はなかりける。

(注) この台本は、岩手県一関市新大町に住んでおられた北峯一之進氏(芸名精悦)が、昭和三十二年(1957)秋に毛筆で筆記されたものを借用し、電子コピーをとり、それを基(もと)にして筆写したものである。

昭和五十八年（1983）一月吉日

佐藤 英 男

歴史上の事件や人物が、一般庶民の間に如何に受けとめられ、伝承されたいかを知るうえで格好の資料の一つが仙台浄瑠璃・奥浄瑠璃であり、今後も可能なかぎり資料収集に努める必要があることを再確認しながら筆を擱くこととする。

※ 岩手大学平泉文化研究センター客員教授